

高校生の部 最優秀賞

八雲が愛した焼津

藤枝明誠高等学校 一年 森 緩南

小泉八雲の「焼津にて」を読む前に考えていたことがある。毎年、夏になると、妻を地元へ残し、八雲は息子だけをつれて二人で焼津の魚商の山口乙吉さんの家の二階へ下宿していたそうだが、どうして八雲は焼津なんかに住み、またそれについての作品を書いたのだろうかという疑問だった。私は生まれてからずっと焼津に住んでいるにもかかわらず、焼津の良さを見つけることができずにいた。ただ魚くさいだけだし、有名なものも港くらいしかない、まわりに自慢できるものなんて一つもないじゃないかと、思いきり焼津を否定している自分がいた。そこで私は知り合いのおじさんに「どうして焼津に八雲はきていたと思う？」と聞いてみた。すると、

「八雲は妻のセツが怖かったから、あまり家には帰りたくなかったからじゃないか？」

と言われた。私は、そうかも知れないと思った。もしかしたら八雲は、焼津がいい所と思っているより、ただ逃げやすい場所として適当だと思っただけかもしれない。でもそう考えると、八雲までが焼津を否定しているようで少し腹が立った。自分が焼津を否定するのは別にいいが、八雲のようなよそ者に焼津を否定されるのはなんだか面白くない気分になった。だから私は、八雲はどんな人なのか知りたくなり「焼津にて」を読んでみることにした。

焼津の行事で、お盆に燈籠を海へ流すというものがある。泳ぐのが得意な八雲は、あるお盆の夜、燈籠を追いかけて泳

いでいった。「精霊が通るときは海は危険だ」という言い伝えがあり、漁師さん達もその期間は船を陸に上げて仕事を休んだものである。そこで燈籠に追いついた八雲は、浮かんでいるうちに自分は、本当に一人きりなのかと何か気配を感じ、自分の身の上に不幸が降りかかるような気がしてきた。灯りに向って「別れの念仏」を唱え、岸へ向って急いで戻ったのだそうだ。

私には八雲の行動が理解できない。焼津の海は底がいきなり深くなったりして危ないし、しかも、お盆に海に出るのはよくないと知りながら。きっと八雲は、突拍子のないことをやってしまう変わった人なのだろうと思う。私だったら、死人を思っ流した燈籠には怖くて近づけない。さすがに八雲

は怪談を書いているだけに大胆なところがあると思った。

岸へ上がった八雲は、乙吉からある話を聞いた。それは昔、漁師の娘が何里か離れたところに恋人がいて、夜になるとその男のもとへ泳いで会いに行き、朝方また泳いで帰ってきていたという話だそう。男は女のために道しるべに火を燃やしていたが、ある日燃やすのを忘れたか、風で消えてしまった。たかだ娘は方向がわからなくなり、ついに溺れてしまった。伊豆では有名な話である。聞き終えた八雲は、その娘はかわいそうだとつぶやいた。

その娘は、恋人のことが好きでたまらなかったのだろう。今を生きる私は電話もメールもある。いつでも連絡をとることができる。毎晩泳いでまで恋人のところに通うほどの忍耐

力は、現代人の私にはない。私が江戸か明治時代に生まれていたらと考えても、できる気がしない。もしかしたら男も、娘の気持ちが悪すぎてもう娘に会いたくないから、火を燃やさなかったのかもしれないと私は思う。そうだとすれば、「娘がかわいそうだ」という八雲の気持ちに私も同感である。

私は「焼津にて」を読んでから焼津の見方、感じ方が変わった。どうして八雲は焼津の作品を書いたのか。それは八雲は焼津の温かさ、日本らしい生き方、焼津の風習、海を作品として残しておきたかったのではないかと感じた。故郷のギリシアを捨て、日本を愛した八雲にとって、焼津が一番日本らしいと思えた場所だったのかもしれない。

私は八雲のことを知ってから、自分は、焼津と向き合っ

いなかっただから、焼津を否定していたのかもしれないと思うようになった。「田舎だから嫌」という変なプライドを持っていたと思う。

八雲が毎年楽しみにしていた、東海一と言われる荒祭りがある。小さい頃から、父に肩車してもらいお神輿に触りに行ったりしていたが、今年初めて、本格的に参加してみた。大漁を祈り、白装束を身につけ、「アイエットン」と声を出しながら群れをなし焼津の町を練り回る。人と関わることをあまり好まなかった八雲だが、毎年乙吉さんの店の方へと出て、若者をねぎらいながらご祝儀をはずんでいたそうだ。八雲も、「アイエットン」と声を出していたのかなと考えると楽しくなった。

こんな焼津の温かさに私は包まれて育ってきたのだ。両親、小中学校の級友、私をかわいがってくれた町内のおじさん、おばさん、荒祭りで出会う人々、そして魚くさく豪快な焼津の町。こんな宝物が他にあるだろうかという気持ち湧き起こってきた。気がついたら焼津が好きになっていた。